特別寄稿

Go Forward ! KEITA!

今こそ1%の可能性を信じていこう

(株)ＫＥＩ 代表取締役社長 加藤 啓太

今、私は三十三歳で（株）ＫＥＩという会社の代表取締役社長を務めさせていただいている。いわゆる会社の最高責任者だ。「社長」という響きは世間では〝カッコイイ〟や〝すごい人〟と感じる人が多いと思う。しかしそんな私には、波乱万丈な人生の幕開けであった。

私は生後三ヶ月の時、原因不明の窒息をして重度な障害を負った。今生きていることは「キセキ」である。「キセキ」はいつまでも続くと信じている。例えどんな窮地に立とうと悲しいできごとが舞い降りようと、それも「キセキの人生」だと私は思っている。そもそも障害者になったお話をさせていただく。生後三ヶ月の一九八七年十二月二八日、自宅の部屋で三歳年上の兄と『ひらけ!ポンキッキ』というテレビ番組を見ていた。『ひらけ!ポンキッキ』が終わって兄が母に「啓太また寝ているよ」と言ったそうだ。母が「朝起きたばかりで寝るなんておかしい」と思って慌てて見に行ったら窒息していた。救急車の手配をしてから母が人工呼吸をしたことで、命は取り留めた。窒息して当時の医師から「生きられても知能的には一〇〇%、身体的にも九九%無理でしょう。植物人間でしょう。長く生きられても五年」と告げられたそうだ。私は障害を負った。障害名は「脳性麻痺」だ。それから両親が私に何とか回復して欲しいという熱い思いがあり世界で最も厳しい「ドーマン法」を知り十年やった。その結果、電動車椅子での生活（重度障害が残り二四時間三六五日介護が必要）・言語障害は残るものの知的には支障をきたさないところまで回復した。小中高は愛知県立名古屋養護学校（現：愛知県立名古屋特別支援学校、以後：養護学校と省略）に通った。

昭和、平成、令和と時代は変わってきた。今日の障害者の教育・福祉・障害者スポーツは果たしてどうだろうか?と考えるのである。重度障害者の自立生活をアシストするヘルパーステーションを経営している。この会社の理念は「Ｏｗｎ Ｙｏｕｒ Ｌｉｆｅ」であり、関わるすべての人に価値を生み出し、幸せな人生を構築することである。しかしそんな私は重度障害者ですべての行動に人の手が必要だ。ものを取ること、食事をとること、そして言語障害も兼ねそろえている。要するに「パーフェクト障害者」である。

この状態なら、九九%の人が施設入所あるいはデイサービスに通うことを選択するだろう。私は違った。当時の養護学校で「大学に進学」するという意向を両親・学校・友人に伝えた。だが、全員に「絶対無理!行けっこない!諦めなさい…」と言われた。正直、悔しかった。「夢物語」と笑われたこともあった。当時、養護学校から大学に行く人は0に等しかった。その理由として養護学校の勉強では大学受験に追いつけないということと、大学に入ってから授業についていけるか、本当に単位を取得・卒業できる体力があるか、などだった。当時、私も教員にこういうことを問い詰められた。その時に私はこう考えたのだ。できるかできないかではなく、〝やりたいか、やりたくないか〟と自分に問い詰め、答えは「大学に行きたい!絶対に行く!」と心に誓った。

しかしもうひとつ問題が出てきた。実は私、高校の勉強はやっていない。というより、勉強したくても勉強のクラスには入ることができなかった。中学までは義務教育ということもあり、私に対応できるだけの教員が配置されていた。だが、高校は義務教育ではないので、私に対応できる教員の配置ができず、三段階も下のクラスに入った。こういう厳しい状況に立たされていても私が受かる受験方法はないだろうかと必死に探したのであった。ＡＯ入試（アドミッションズ・オフィス入試）を見つけた。ＡＯ入試とは、大学の入試方法のひとつ。大学の入学管理局（ａｄｍｉｓｓｉｏｎｓ ｏｆｆｉｃｅ）による選考基準に基づいて、学力試験を課さず高等学校における成績や小論文、面接などで人物を評価し、入学の可否を判断する選抜制度であった。「これなら同じ土俵に上がれる!」と思った。教員たちにＡＯ入試で受験させてほしいと伝えた。教員たちは、最初は手探りで半信半疑だった。私はものすごく希望が持てた。なぜなら中学二年生からやっていた障害者スポーツのボッチャと福祉を結び付けて障害者の自立生活をサポートするという希望動機があったからだ。

結果は、なんと現役で、日本福祉大学に合格。大学に進学したかった理由の一つには「友人をたくさん作って女の子とも遊びたかった!本気で彼女が欲しかった!」である。これは〝不純な動機〟であるが、障害者の自立には欠かせない要素だ。大学四年間は本当に充実していた。単位も難なくとることができ多くの友人たちに助けられた。おかげで、四年で無事に卒業できた。正直、両親は卒業できないだろうと腹をくくっていたそうだ。私は何をやるにも人の何倍も時間がかかるので自分なりに工夫をして努力していた。

卒業はできたものの、就職活動を失敗したのだ。四十社も受けて四十社の不合格通知を受け取ったのだ。本当にその時、挫折した。しかしこのピンチは「チャンスに変えられる!」と思い、夢だった『法人設立』をすることにした。勿論、その時も周囲から大反対を

された。しかし大学を卒業したのにもかかわらず〝無職〟は嫌だった。自分で人を雇い経営することならできそうだと考えた。ＮＰＯ法人を設立して、障害者の自立生活をサポートするヘルパーステーションを立ち上げた。現在は株式会社ＫＥＩとして経営しているが、日々勉強し成長していかなければ存続は難しいと痛感した。経営者として丸十年が経とうとしている。十年間は波乱万丈であった。

波乱万丈の「支え」になったのはパラリンピック正式種目である「ボッチャ」の存在だ。私は重度障害者でスポーツをやるのは難しい。いつも見るだけだった。ある日を境に私の思いは「スポーツがやれる」と一変した。ボッチャという競技を知ったからだ。

ボッチャは、重度脳性麻痺者や四肢重度機能障害者のために考案された競技で、カーリングに似たスポーツだ。先攻が投げ入れたジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールめがけて、両チームがそれぞれ六球ずつのカラーボールを転がし、いかにジャックボールに近づけるかを競うゲームだ。障害のために手で投げられなくても、「ランプ」と呼ばれる滑り台のような補助器具を使い、自分の意思を競技アシスタント（介助者）に伝えて参加できる。

出会いは二〇〇一年九月「ボール遊びが好きならボッチャをやってみないか」と知り合いに誘われ見学に行った。最初は「つまらないスポーツだ」と思っていた。しかしだんだんボッチャのことを理解するにつれ、おもしろさを感じた。パラリンピック正式種目だと聞かされた。私は、競技アシスタントにランプの方向や角度を指示してプレーする。中学二年生の時に「パラリンピックに出場したい!」という夢を抱いたボッチャではロンドンパラリンピックにも出場した。

ボッチャを本格的に始めてから様々な変化があった。自分の意思を完璧に表現できる喜び、夢を持って生きる勇気、それを実現する力が付いた。例えば、可能性が「0」に等しい大学進学という夢、大学卒業して無職になった時も「ボッチャ」があったからこそ乗り越えられた。

私のヘルパーステーションでは勿論、ボッチャでの目標を達成するためのアシストと自分らしい人生を謳歌できるよう、体制を構築している。将来の障害者福祉・障害者教育がどう変わるかは予想できないが、「障害者＝支援してもらう対象」という常識・当たり前を、私はなくしたいと思っている。

また私は多くの場所で、〝一〟%の可能性をあきらめなければ夢は叶う〟というテーマで講演や社員研修をやらせていただいている。障害の有無関係なく誰でもどんな夢でも叶えられるのだ。ただ、多くの人は一回失敗しただけで「もう駄目だ、自分にはできない」とあきらめてしまう。

ロンドンパラリンピックにて

私は、これまで多くの夢をおかげさまで叶えられた。叶えられた理由がある。それは〝成功するまでやり続ける〟ということだ。私は、器用な人間ではない。才能などは本当にない。不器用な人間だ。「また、啓太が何か言っている・・・」と言われることも、少なくはない。

だからこそ、何十回・何百回・何千回も繰り返し挑戦する。そしてだいたい一〇〇〇回は失敗しているが、一〇〇一回目で成功している感じである。皆さんは何回ほど挑戦しているのだろうか。だいたいのことは一〇〇〇回挑戦すれば一回は成功するのだ。

ここから私が伝えたいことは何かをやろうと思ったら、たくさん失敗することが成功への近道である。「何があってもやり続ける」という意識・環境づくり、どうすれば夢は叶えられるかに集中して普段の行動から意識することが大事。マイナス発言をせず、常にプラス思考で行けば夢により早く近づくのだ。どんな重い障害があろうと、気持ちとやる方法さえ考え見つければどんな夢でも叶えられる。

コロナウィルス禍を「マイナス」に捉えられるが、重度障害者の人にとっていろいろ社会の変化により障害がない人たちと同じ土俵に立てるかもしれない。特にテレワークが進み出社せず自宅で仕事することが「通常」になってきた。つまり、職場のバリアフリーや出勤の足など考えなくて良いのだ。障害があっても技術・知恵・やる気があれば障害がない人と同じ土俵に立って切磋琢磨できる「新時代」がやってきたのである。これこそが「共生社会」ではないだろうか。

障害がある人もない人も、自分の中に価値を見出し、生きていけるような社会をめざす。私も微力ながら社会にどんなことができるかを考え、行動していく決意である。まずはこの愛知県・名古屋市から実践していきたい。